

佐藤正治さんは、岩手県の陸前高田市で生まれてから、51年間暮らしてきました。昨年3月まで印刷会社に勤めていましたが、3月11日に発生した津波は彼の職場をも襲いました。

「地震発生時、私は事務所の2階で会議中でした。余りの揺れで、転ばないように棚やコピー機に必死でつかまりました。揺れが収まってから1階に下り、目に入ったのは棚から落ちて、床に散らばったインクや紙。それでも最初は、あんな巨大な津波が来るなんて想像もしていませんでした。過去にも、陸前高田では頻繁に地震が起こっていて、50センチから1メートルくらいの小さな津波が発生することはありました。だから津波警報が鳴ってもそこまで心配はせず、事務所の片付けをしていたんです。ところが、警報が鳴り止まなかったので、同僚と一緒に、高台に逃げることにしました。事務所に鍵を掛け、海辺の方に目をやると、近くにある6階建てのホテルの後ろに、何か白い霧のようなものが見えました。その時はそれが津波だとはわかりませんが、『逃げろ!』という声を聞いて、できる限り遠くへ逃げました。高台に向かう途中、何人もの人たちが、茫然と立ち尽くしていました。中にはお年寄りもいましたが、私は高台へ進み続けました。後で、高台から下りて人を助けに行った人が、津波に飲まれたと聞いた時の思いは、言葉では言い表せません。



佐藤さんが撮影した
津波の写真

その晩、避難所となっていたキャンプ場のそばを歩いて、家族を探しました。私はそこで娘と妻の両親を見つけました。勇敢にも妻の両親を連れて逃げてきたくれた娘を、誇りに思いました。それまでの心配が溢れでるように、娘を見つけたときには、涙が止まりませんでした。

次の日、娘と一緒に、陸前高田の中心街を見に行きました。妻の仕事場は私の事務所よりも海に近く、妻は津波にさらわれてしまったのではないかと、心配でたまりませんでした。しかし、途中で妻の友達に出くわし、妻は、とある避難所にいることを知りました。急いで駆け付けた避難所で、妻と再会した瞬間に感じた安堵の気持ちは、一生忘れられません。



震災直後の佐藤さん宅

一週間ほどたって私たちは自宅を見に行きました。家全体が津波に襲われ、酷く損壊していたのを見て、その時はもう、瓦礫を撤去し、掃除する気力など起こりませんでした。陸前高田を復興させるには最低10年はかかるだろう、またその頃には私は定年退職である60歳を超えていると思うと、本当に自分の将来が心配でした。

そんな時、大船渡に住む弟から信頼できるボランティアさんが手伝ってくれると聞きました。だから自分も手伝ってもらおうと決めました。こうして遠くから被災地に足を運んで、助けて下さるボランティアさんに、本当に感謝しています。

その後段々と、こう思えるようになったのです。もし仕事を見つけることができなければ、ここから引っ越さなければならぬかもしれないかもしれないし、被害も受けたけれども、まだ、家が残っている。それだけでも私は幸運だ。私はここに残って、この街の復興を支え、見届けたい。」と。



佐藤さんとハビタットボランティア